



【イエスキリストを迎える人々の姿勢】

聖書本文；マタイの福音書 2:9-12/ 暗唱聖句:ルカの福音書 2:14

説教者：鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 今日は待降節の 3 週目を迎えています。来週はいよいよキリストの聖誕のクリスマスの週になります。イエス・キリストの御誕生は偶然とか突然おとずれたものではありません。予め、神様の御計画の予言の通りに成就されたのです。それにもかかわらず、イエスを迎える人々の姿はそれぞれでした。今日は 2000 年前イエスキリストがお生まれになられた時、人々はどんな反応を示したのか調べてみたいと思います。したがって、来週クリスマスを迎える我々もどのようにイエス・キリストを迎えようかと考え、備えていく一週間となりますよう切にお祈り申し上げます。

ユダヤの地に神が人の姿で来られましたが、当時、人々はどのように受け入れましたか。その当時の人々からいくつかの部類を考えることができます。

始めの部類(ぶるい)の人々は'無関心'の人々です。旧約の預言者らは特にイザヤを通して、7 百年前からメシヤが来られると予言され、時が満ちてついにメシヤがお生まれになりました。ところが、大体の人々は関心がありませんでした。イエスがこの地に生まれたことと自分と何の関係があるのか、です。全然関心がありません。それは当時も、今も今日も同じです。この無関心が問題です。クリスマスが近づいて来てもイエスキリストには関心がなくただクリスマスの日を楽しもうとします。知らないからです。

みなさん、聖誕の意味は何ですか。有名なドイツの神学者だった'カールバルト'は聖誕の意味を'神はいと高き所におられ、人間はあまりにも低いところにいる、神の時間は永遠であって、人間の時間は有限であるがゆえ、神と人間は交わることができなかつたため、神はみずから、人間の姿でこの地に来られたのだ。神がくだって人間を愛され、慰め、救い、友となつてくださったのです。これがまさに聖誕の意味だと申しました。それにもかかわらず、人々はその意味も知らず、知らないため関心もありません。ですから、知らないこと自体がのろいのです。知らなければ信じることもできず滅びるしかありません。当時多くの人々がこの地に来られたイエスをそのように無関心の中から迎えました。こんにちも同じです。毎年クリスマスが近づいてもクリスマスの真の主人公であるイエスキリストよりも、自分の事で、この世の事でしか関心を持ってないのも 2000 年前も今日も同じではないでしょうか。

我々こそがまだイエスキリストを知らず、今年もまた無関心の中にいる人々のため、この無関心をやぶってイエスキリストの良い知らせ、主の福音を知らせ、伝えなければならないのではないのでしょうか。

二つ目の部類はイエスの誕生を知識でしか受け入れなかつた人々でした。当時祭司たちや、学者たちがここに含まれます。彼らは一生涯旧約の預言書を研究し、暗記しました。いつかはこの地に神の子であるメシヤが予言の通り、お生まれになるのだと知識的に言いました。信仰は知識が全部ではなく、信仰は心からであり、手と足とならなければなりません。いざ、イエスキリストがお生まれになったら、彼らは信じることはできず、むしろ疑っていました。キリスト教は知っていることが力ではなく信じる力が力です。神の力を多く信じれば多くのわざを見ることができ、神の力は確実に信じれば、確実にみわざが起こります。我々の主イエス様は'あなたの信仰があなたを救ったのだ。' 'あなたの信仰のとおりになれ'と言われました。キリスト教は一生神を深く学び、知っていく必要がありますが、知識が決して全部ではありません。当時、祭司長、学者たち、書記たちは聖書の知識は豊富(ほうふ)だったとしてもいざ、イエスキリストの誕生は知りませんでした。こんにちもみどりイエスの誕生を心から信じない人々がいます。多忙だった今年を後にし、残りの時間だけでも頭ではなく心からイエスキリストを迎え入れ、交わり、黙想する時間を持つてはいませんか。

三つ目の部類は'迫害者'たちですヘロデ王のような人々です。東方の博士らが遠い所から歩いてヘロデ宮殿に訪ねて来ました。ヘロデ王に"ここに王がお生まれになったと聞きましたが、ご存知でしょうか。"と問います。東方の博士らは御使いから神の子がお生まれになったという知らせを聞いてここまでやって来ました。彼らは'きっと神の子がお生まれになったのなら、宮廷(きゆうてい)ではないのか'と思い、ためらわず、王宮(おうきゆう)に行きました。ところが、ヘロデ王は初耳(はつみみ)です。むしろ、この地に王がお生まれになったことにさらに驚かされます。なぜだったのでしょうか。自分の王座が取られることを恐れたからです。権力者たちが哀れなのはライバルが現れることをいつも不安に思っていることです。つまり、自分の既得権を守る事に必死です。そういうわけで独裁(どくさい)をし、相手を見くだし、迫害までもするのです。ヘロデ王も自分だけのために生きていたため愛と平和の王として来られた救い主のイエス様さえも自分の敵だと思ひ込み殺そうとしたのです。

ヘロデ王は王がお生まれになったという知らせに仰天(ぎょうてん)して、二歳未満の子供を全部殺すようにと命じました。その時夢で天使がヨセフに現われ急いでエジプトに身を引くようにと啓示されます。そういうわけでみどり子イエスは災いをまぬかれる事になりました。その時もヘロデ王のような迫害者があり、今も同じような迫害者があります。後ヘロデ王は自分の息子さえも自分の王座を狙っているのではないかと疑ってしまい殺してしまった精神的な病人でした。歴史家であるヨセフスによると、このヘロデ王は自分の息子を殺して七日目に腸(はら)がくさって死んでしまったと証言しています。自分だけのために生きる人の結末はまさしく哀れで、悲惨です。

四つ目の部類は東方の博士らです。マタイの福音書 2 章を見ると東方の博士らは王の王であられるイエスの誕生を知らせる星の動きにたがってベツレヘムまで来て礼拝し、拝見することができました。彼らを注目して見る必要があります。彼らは天文学者であり、科学者だったのにもかかわらず、宇宙万物を研究しているうちに神様の御言葉を知り、イエスキリストの到来を待ち望んでいた素晴らしい信仰

の人々でした。ベツレヘムに待ち望んでいたメシヤが生まれたのにもかかわらず、だれも知りませんでした。その地を治めていたヘロデ王すら知りませんでした。一生涯を旧約の預言書を研究していた祭司長たちや学者たちでさえも知りませんでした。自分の宿(やど)で神様の子がお生まれになったのにもかかわらず、宿屋(やどや)の主人さえも知りませんでした。

しかし、そのメシヤの誕生を知って訪ねて来た人々は意外と遠くに住んでいる東方の博士たちでした。

ここで東方というのは当時ペルシアの地方だと推測する学者たちが多いです。今日で言うとイラン、イラク近東を言います。そこからエルサレムまでははるかに遠い道です。彼らは山を越え、川を渡って、ただ、この地に来られたメシヤなるイエスキリストに一度会うためにはるばる遠くから来たのです。

それに手ぶらで来ましたか。みどりごに礼拝をささげながら'黄金、乳香、没薬'をささげました。どんなにすばらしいでしょうか。ルカの福音書 2 章によると夜、御使いたちが現われてつけてくださったと記されています。そういうわけで彼らは山を越え、川を渡ってベツレヘムの馬小屋にまで来てみどりごイエス様に拝見することができたのです。どれほどすばらしい祝福でしょうか。

彼らはこの世に来られた神様に直接拝見することができました。お言葉に従ったマリヤも、羊飼いたちも主に会いました。普通の祝福ではありません。その当時の学者や書記たちのように知識だけの聖誕になってはいけません。最後まで自分しか考えなかったため多くの人々を犠牲させながらとつてもみじめな結末を迎えたヘロデ王のようにもなってはいけません。当時エルサレムの市民たちのように無関心の中で聖誕を迎えることもそうならないように気をつけましょう。むしろ、東方の博士らのように聖誕を迎えるべきではないかと思えます。

<適用>すると東方の博士らはどのように聖誕を迎えたのでしょうか。

(1) **御言葉の通りに信じて守りましょう。**彼らは不思議な星を見た時その星がメシヤの誕生を示す聖書の預言(民数記 24:17)の成就だと信じて聖誕を守りました。我々も神様の御言葉をそのまま信じ、イエス・キリストがこの世の救い主であることを信じて、聖誕を守らなければなりません。そして東方の博士らはみどりごに拝見した後も御使いの指示に従いました。御使いが彼らに'ヘロデ王に会わないで、他の道で帰りなさい。'と言われた時、博士らは最後まで神様のお言葉に従いました。もう一度私たちも主の御言葉に純粋に最後まで従う姿勢を持たなければなりません。

(2) **悟らされた通りに実践しましょう。**彼らはメシヤの誕生を悟り、そのメシヤに礼拝するために遠いところであっても、どんな犠牲を払ってもベツレヘムにまで来てみどりごに礼拝をささげました。ただ御言葉を読んで、知っているだけではなく、その御言葉を悟り、その通りにどんな犠牲を払っても従う決心をしましょう。

(3) **尊いささげものをささげましょう。**東方の博士らは自分たちの大切なものを感謝と喜びをもってみどりごに礼拝し、尊いささげものを惜しみなくささげました。マタイ 2:11 以下 '宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬 を贈り物としてささげた。' 歴代誌第一 16:29 節 '御名の栄光を主にささげよ。ささげ物を携えて、御前に行け。聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。' この御言葉にしたがったのです。聖誕節は神様が我々を愛したゆえに、惜しみなくそのひとり子イエスを贈り物としてくださった日がクリスマスです。ですから、我々もイエス様のようにクリスマスを何か自分がもらう日としてではなく、主のため分け与える日として過ごすべきではないかと思えます。

▶ここで **東方の博士らの贈り物の意味**についてしばらく考えて見たいと思えます。

黄金はイエス様がこの地を治める'王'であることを象徴します。当時の黄金は王権を表わします。ですから東方の博士らはこの地に'ユダヤ人の王であり、人類を救う王'として来られたイエス様に王権を象徴する黄金を贈り物としてささげたのです。そして'乳香(にゅうこう)'は祭司の時に使われた物であって、イエス様が永遠の'大祭司'であることを象徴した物であり、'没薬'は遺体保存のために使われた物であって、人類の罪を背負い、十字架の上でとげの冠をかぶり、両手と両足にぎを打たれ、死なれることをすでに察(さつ)して没薬をささげたのです。そういうわけですから、彼らがささげる贈り物には象徴的な意味がもっと大きかったのです。

<結論:低いところに来られたイエス様!>

愛する信仰の家族のみなさん!メシヤなるイエス様は馬小屋でお生まれになりました(ルカ 2:7)。'男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉(かいば)おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。'これはイエス様の生涯をよく表しています。栄光に満ちた天の御国から汚(けが)れた世に来られましたが、派手な宮廷ではなく、金持ちの華麗なる邸宅(ていたく)を選ばず、貧しいヨセフの家庭を選び、誕生は飼葉おけでした。イエス様の生涯はののしられ、卑(いや)しまれる貧しい人、罪人、孤児、病人の友とされました。飼葉おけで生まれたイエス様はこう言われました。

'すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)' イエス様は小さい町であるベツレヘムに来られました。'ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して、一番小さくはない。私の民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから(マタイ 2:6)。'神の子は聖なる地であるエルサレムに来られませんでした。権力の都市であるローマに来られませんでした。文化の都市であるアテネでもありません。

イエス様はユダの町の中で、小さい町であるベツレヘムに来られました。今も主が好(こ)んで探すところは小さいところです。つまり、自分を小さく思いつつへりくだった者たちとともにおられる主であることを信じて下さい。

イエス様がこの地に来られたのは神様の愛の最高の極致(きょくち)です。主の御前で敬虔に自分を低くさせへりくだってキリストの聖誕を迎えるクリスチャンプレイズチャーチのみなさんと我々の教会となりますように、そのように従おうとするわれらの上に主イエスキリストの尊い恵みと愛が満ち溢れますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!